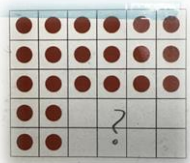


授業で「『学び』の心」を発揮した子どもたち

皆さんは学校の授業について、どのような印象をお持ちでしょうか？子ども時代の私については、「きつい…（ため息）」というイメージを持つ教科等が多かったものです。特に算数は辛い教科の代表格でした。ある意味、苦行でした。しかし、過日その算数で、子どもたちが「『学び』の心」を発揮している姿が見られました。

「どうにかしたら、かけ算九九を使えるようにできるかも…」



その子どもたちの学習単元はかけ算でした。かけ算九九（以下九九）のすべての段を学習し終えている段階です。その日、先生が提示された問題は、図を見て丸（以下●）の個数を求めるものです。いたってシンプルな問題です。しかし、子どもたちにとっては難問でした。

なぜならば、●の並び方がこれまでとは違ったからです。これまでの学習では、●は長方形や正方形を思わせるような“きれいな形”を構成していました。でも、この問題は一部が付加されている、あるいは欠損しているように見える“いびつな形”なのでした。

ですから、子どもたちは「九九を使いたいけれども、これでは使えないよ…」となりました（こういう現象を「認知的不協和」といいます）。既に九九という知識（「既有知識」或いは「既習事項」といいます）を獲得している子どもたちは、一つずつ数えるのではなく、既習事項を活用したいという気持ちがあります。なので「九九を使いたいけれども…」と困り感を抱いたのでした。

ところが、ここで子どもたちは自分たちで解決してみようという能動的な姿を見せました。「●をどうにかしたら、九九を使えるようにできるかも…」（このように子どもたちが自ら抱く思いを「問い」といいます）と考えたのです。「問い」を共有した子どもたちは、それぞれが個別かつ自発的に●を“どうにか”させ始めました。そして、九九を適用できるよう自分なりの考えを働かせてみんなて話し合い、見事に解決しました。

知的好奇心が高まりそれが次の“学び”につながりました

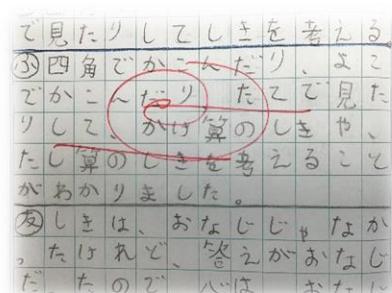
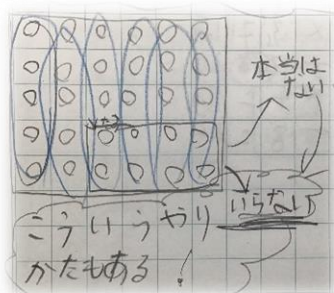
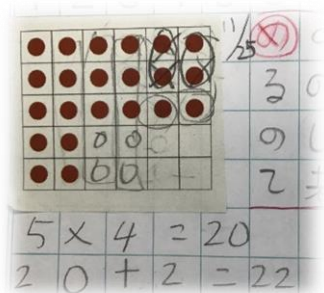
授業の終わりにある子がつぶやいたそうです、「算数がおもしろくなってきた。」と。素晴らしいつぶやきだと思います。この「おもしろい」は娯楽ではありません。知的好奇心の高まりを意味しています。英語で言えばアミューズメントではなく、インテリクチュアル キュリオシティあるいはインタレストです。

子どもたちは問題を発見して「問い」を持ち、個別で考え、それらを交流しながら協働し、解決できました。考える楽しみ、知的な思考過程を存分に味わったのです。子どもたちにとって、授業では苦行ではなく知的に楽しい「『学び』の心」を具現化した場なのでした。

翌朝に提出された多くの自主学習ノートには、この日の算数について記してありました。授業での“学び”が知的好奇心をより自ら高め、家庭での学びにつながったのでした。



【学校だよりへの二次元コード】



【お礼】授業参観と学級懇談会の際は、ご来校いただきましてありがとうございます。学校評価回答もお世話になりました。結果をもとに、全校挙げてよりよい教育の推進を目指します。